世説文製錦

雜三

六

六丹之内

大阪文庫

大阪文庫

嵐文雪物六巻目録

巻三

賀 初丁　婚姻 二　毒害 六　嬰児 八　雜部 十四

旅 十九　海路 二十　行路 廿二　病 二十四　物怪 廿四

嘉陽 四十

車中のたよりにてこゝろまつろいたいて云ミクシウ

舎人の死のきあと地ハ必とあるそ是白物のゆきつゝぬ安いまとゝ

きこゝろこゝちして

木のもとにて

枕

まことにあるあるわるとものとものあるまゝ次のまゝ雜なるを云

枕

洲いのやうこかゝりなるとゝ只めとりてみをいるたとそうけ

いら

紫文製錦六巻

安藝　源　稲彦　撰

雑　三

賀

若菜上卅二十ウ

菊はおとゞのにしれたるもちいでよおほきまうちぎみ。屏風
うべしろうまうづのつくりしてくちうひとつうゑれ出たり。
うるちくいしるどいたてゞ五ぢしき三十枚ぬきて
けうろくなどすべくうれぬぐどもいときさうにせさせ

あつ。らぞんぜんづ。ふさうひにぱ。ろと和よつ。
すべく。交をぜぱさうぐ。からぼ。くすりぜをこぱすべ。
ゆするつぎ。かくげぜをるどやうぜりのうちくさよ。
らとつく。ぱつり。ぱうぎ。ぜぶいよ。ぢんぜをろんをぜ
くりあづ。ぱきあやめをつく。おるぐきかひをもぐつ
うむるーたるうろをべあり。
円 世六丁オ
○ぢんのをーきよをーてぱわるみさをどうまあ
まつり。ぱうろけぱりあむく。
源氏元 小松ぐ。すあのようむにひうれてや。姫べのわるみ

も。をぜつむべき。
円 世六丁ウ 四十枝
○ぱりのようえぐ。をうひつあのようぐ。四十 文書 弁納言を初
めあまりえくさるべきかぎりやうつきぬ。
円 上
○ぱうぐ。けぐぶり。あ菜ぜぱあつりのまわるぱあ 源氏 澪
よをぢんぜかけぐぜむ。ぱりむつきどよ。まつ。く。い
まあきたるぐどよせ。れうり。

婚姻

美 四十九丁オ
ぱさ。ぐぐ。ぐどい。つのまう。ーでけむ。花ぐ。くいとき
ぐ。ーてりちひのさまもさとさ。ぐひいとあ。う

やうこのへうり。

○やうく秋ふけゆくえだよりうゝみやこそく。
夕書
こぶりごちいとたへがうてまろでむゝもえどく
しくゝう作りぬべけれ。反歌ふぶゆづりあひてむやと。
中務よう也へあふ。沼とぐあうむやはやすこはりとあ
よ。おきみいくこ三ひすこてむゝふれば。まろりいと
ぬといひすてこいりあひぬ中務花ちげの袖よ。
いくゝまづやくるまきるべまづ作りやといへハ松よち
きれるハあぐゝあるこ花ろハゆくゝやとせちあ。中務ハ

おろかちいぶ。袖ゝのわざやとおりよにあれど人さ
ふれこふさまよめでこきよかゝもあうをてるむとん
ぶけわることるれバうゝろやすくゝちびきう。
○夕ゝ十六丁ウ
ゆゝ。ゝ。ゝ。

きさんしゐのよ。うく
口上
○文ハいとこ〳〵ろぐるまくおぢ〜なぞう文やう〜きれ
自文之
さくろハいうぞめぞくきさまうよまちおもそれんとさうろ
げさうしてえゐ〜ぶたきしめゐくるれけをえいをんろ
なの〜まちつけゐいるかうれありさまもいとおし
文蔵のくこと
かりけり。ひとれはなどさくやうよあへうよをどいあ〜ぐ。
六兵のさまと
よきなどになりたるこちしゐるどいるんぬく
しくあざやぎ〜くんだへもたをやうるかこいまくぬ
ほうろうよるどやあ〜んさあんう〜〜てあうけ

まるどおがせどさやうなるかけをひよいあしゐるあれん
ざ〜おろうなるべうもゐぐされぎりけり。
月 世八十オ
○ちん殿のこなみのひざ〜えんぐにうりて、おきまま
わまりぬぐいやいまいれけさうなどうるいしげよきよ
らにうくまちひさ紀ぐいふ川よく花豆ぬろくさ〜ぬぐ
もいといまあ〜うせさをゐ記くもちゐもまわ〜せ
あつり。
口 九十一丁オ
○うれよさりなん文まうでさせをりあ記けるぎ〜
きいとんとるりう〜せ女房さまぐるれおうたくう

まつうさぎあひけり。こきーれに来にくひさーるさい
とげこびらうげれさいぐひづくり六ぐいのびらうげせ。
あぐろ二女房三十人わふもりぐろへ八人ぐさふ
らふまーこ沼むろへれいーを十二本(ホン)ほれ人くの
せくるんありけり。ほれおくれと来ア。房上人六位ぐ。
いふぐきりなうきよくつくさせるつりけり。
糸巻十二ヲウ 婦つる光侯きよ
。人ぐーふとやむごとるくおぐーさろはくおほ
るきくなりけりわっき右在とくずきぐーくあて
びてもおーまさぐ。世れありさるもいとよくもりるつ。

ア中やしまふふくもつとおくけりまぐさぐろれと
くなきやうるれどおのぐーくひとのれけもひれあ中
けるやうなうひとれくぎりるさ心ことふめるいきれ
にたまさりるつらい更ア位よなりるるむとびる
ぐ義人殿 れれひはうぐひるくこかどれるくちぐーくごてるへ
るなりよろぐのことたくびてやすきあろんのをを
るんさぐるさなるはやさるへき人えりてうーろ成
まうけよ上在アにはわれーあれけふあすとふぐろ
つるるーあげてむとくろれかせーるなしるよぐも

しでさてこぞこかどもきてしくさうまさりのみ
なるはこころをぐいみーうかうさくよおもくしくゑん
おりしまひめるおくそうへれはむこをそうゑうえあふほど
におりたちゑんそうそうあかの屋よハわれもく
むさそうたてまつうんとまうはくはるれはさくまぶ
しぶなるはけをひあらはぼうぎをたもおがしのなん
ちれしぐうしろやはきこと紙をりや（こまぐ煙の絵）なりとしとおく
よはよいひはぐくるよいとあさまくむるはひたるうこ
にくうちゑくはきてゑくう。

産養

（裏廿二丁ウ）すこうしはあるもたはけまりゑへれはひまおハするみやを
くゑれはは湯りくくるせゑつるようきおこされゑひくく不
はなくうまれゑひゑうまてとおがはとろぎりなきゑ。
人にうつうつしゑくるはいのくけどもはねこぐりまど
ふけいひとものさわぐうくはけとまくこいを
んりとなはいめうぎるなきをとたてさせゑふけよ
やたひうゑことなりはてねしはゑはねざするゑくれと。
やむごとゑきはどもちうぐうゑあせ神のごひて。

いうぎまづてね。
柏木十十オ
○かくこうろうとするにはこうにくずるにこぐおはるる
はおおぐ。いうりゃんどらひいとなこうこうまる。
儀式
はうぶやはぎうさいこうしうおどろくしはるぶく
さまぐにしいでおはうぶやーるひのつはれ
をしきついぶさひだろつきどけんぶべとこさるよ。
こうろぐいどまーさんてつるんふ日は粉い伊文
はいこうりさいりちけおまへのもの女房は井にも。
しぶくよふひあてるさぶくはかやけごよいるあ

しうせさせるつ。はうるどんできふ十ふところく
饗
はきゆう淀はおるべちゆうはりつぎにるふかはく
まーでいろりーうせさせるつ。
宿木八十丁オ
○はうぶやーるひ。こるいれいで文はるそこし
白まこ
ぶどよて。又日は粉はたねどのこうどんできふ十ふ。
蒸ふ
碁ふはぜよ。銭。椀飯
中ふ
もちはおまへはついぶさひ三十ちごはるぶいつへが
さひいこぶはむつさるどぶ。ことくーかーびちのびや
うふちなーるつしどぶまるふれいとわざとあな

きぬこゝろざへまさるべしとぞ思へる。（白文）されおきまへにもせん
うけもてきたりつきぬるにくぶすくまゐる世
あつり。女房のおまへよりいづるをださるものを
くびわりごこゝ千さまぐもつらたることゝもあり。
ひとゝあることくくいたとさるこもなしあるべ
日 八十三ノウ
。（白文）されいろぎこれいろなりあゝ同かゞへ（五十日）（紫式部の）
あひくうけりちひのいうさぶこゝろにいまをくこ
あのこゝろりごるどまぐこゝれつて世れつひれるべ
てよいあるべいとおぶゝこゝろぎゝてちんちゝもろ

紫六

。七

ゝよ。たぐまるどこゝちくれさいくどゝいと拾くゝ
さふいせあへばわれおとゝとさゝぐくれとぶも
れしいづゝ。

嬰児

（若紫北三十オ 源氏物語）
かれいたひあうゝのゝあゝ四ゝ一ゝ寄ゝいうでうゝ。のこ
まへばいとくやうゝ（ふ俗言）ゝ
とのこもゝのを（物を）ゝ
ゝごゝりゝいつくゝ（ゝゝ）ゝゝ
おとくくうへいうゝ（紫上）ゝ
おゝりたるゝ。

（紫上の者）
ゝ
ゝ
ゝ

いとかくふるふるとふひてくもあるまとやゆいさ。紫上詞
ん〜〜ばかりちはあ〜さあぐさめきとのこまひ〜
ろばぞう〜とかゝこさてとやさそうとおぞてのあ。
源氏君詞
いとおり〜ときてあへど記どぐれくるゝ〜とおもひいれ
ば。さうぬゆうにくまあやうなるはとふひとを
えおきあひくぐうつりあをぬ。
口世七丁オ
○思いうへれひさてあひくなきふ〜あへる
紫上詞
に。ゆあうぐえうきどれるれ。和ひ歌の事詞ん
る。えれおハ〜まひるやうとやをひをだおきてたまひ
紫六

て。紫上詞
少納言よなかきうはんいづこやれおは
すうとくうるおハたるはこゝとうたしえよ。源氏君詞
ハあ〜ゆどまるおりあ〜をつべうもあ〜ばこちと
のあのれをびうかうひとをさすぐよきてなく。
ういうをてげりとおぞ〜ゆのとまきう〜ていさ
かし。ゆぶたきさとのあへば。源氏君詞ん
むおれをざのうへゆ。とのこのれよいまさ〜ようと
ゆへとのうまへばゆのとれされば〜うかうつぐ侍
ゆどうくなんとくぶ〜ゆをたくまつるれば。紫上詞ん

もなくゆきまくるにてをきゝいまくさぐりゐれば。
なまこうなるはぐさ。こゝつやくとかるまくすゑは
ふさゆうよさぐりつひゝれうるどいはうつくうお
りゐゆくるをゝゝへたまれば。紫上のゑ例をぬ人
はかくちづきゐへるはおうろうて。紫上の孫をんとふ抱
をゝくをひくゝゐきつゝのゆつきくすづつく。
いまハまつぐおりふべきむとぐなうと見ゆむぐは
つのふ。

紫式部七十ウ

○ひめ姫ハあるごろもなくてぬくるまにのんと

式いうぎゆふゝよやるゐるよそくぼとみぐゝるき
ていぐゐゐつり。姫君のきゝとはよりハいとうつくうてゝうでを
ゆゝゝへてのりたまへとひくもいううおがく。
すゐとふきふるゝ糸ぬ松ゆひきわれいつゝ本だう
きかげをかるべきゝえもいひゆゝびいうゐけがり
や。あるくゝしとおがゝく。
源氏ハ
おひうちゝ孫もあるゆれしだけくまぬ松ゆふまれの
ちゝ式ゆうぐんのどうゆをとなぐさめゆふ。
ロ九丁オ
○わらぐゝハ。ゝちゝく孫ゆをゆけりぐきおろ
紫式部考

さんぬくるあさなどハしるのいとぶ。紫上の歌
まゐりゐどしたまへどやうくかんめぐしてきこ
ゆ及くゆをりとめくらうたげよ打ひろこゑへ。め
のとめしいでぬぐさめまきこけ家しゆふ
。いろふひおこすんわれなくいろうえしか紫上の振舞をたづね
月十二丁ウ
ヲとめべきさふ紙どうちまゐうはしふとろにいきて。
うつくしげるほち紙くめあひつたちぶれかあへる
ひさまこにおかうり。
横笛五丁オ
。わうぎこうはめのとめとよ紙こまつりゆるおきて
廿三表

たゝをいくるあひくゆ紙をひきまつをれたるのみさふい
ゆうをそくし。
月五丁ウ
。おゆたうるあゆらいしよ。仏のもゐくひたちゐうていと
あはるでしうぷゆうちしてくひかをぐりゐどしゐへ
。源氏系図
ハあるらうかりやいとふぶんるりかしとうくせく
ゐりのよめくゆあゆとりのいひさるなき女こゐも
くういひゐせとくわくをゆふ。
月六丁ウ
。ひ歯ゆおひいづるにくひあてむとくだうゐとつ
廿三表
とにぎうりちくをぎくもるとくひめしゐへると

らいしいゆ廿三表
きど入くゆ巻へ。

孫ちけるえだのこかをとく。
源氏 うきふしもわすれずするぞうえ竹のこかすくぐるき
ものよりきけるとゝろくゝあちくのこまひかりぐうち 注考
わゝひくゝ行ともおりひたゝびいとうぐうゝもひかり
さわぎあり。
日 十六十才
○ちゝはゝいぐるあひくく大ねゝうえいぐきなりくあり。 自家のうゝのもん
たへかくおをせとゝらぐゝかゝこまうくゝとちどけな
げまのゝこまへいらちわゝひくおゝまをいとぐきすの
まへをばわゝり行ゝんいときゆゝぐるんとてぐきた

てまつゝくわゝこまへ。 自家日
あゝくとてゝ。ゝ細ゝてさゝかゝくゝあへいとうくゝうて。
わゝくなりあゝ。ゝにまゝにも二ゝ此えゝ此ゝろぎことゝをとゝ 蓬考
にまぐゝくあうゝをあをうつくゝておゝまゝなる足 源氏考のこ
けりすゝこゝまの行ゝどおろゝなりあゝを二ゝ此えん
つけるひくゝまろも大ねゝよぐゝうゝむとのゝくゝを。こ
此えあゝ大ねをやとくゝひくゝあゝう。 源氏考 ゝをゝうゝむぐ
て。ゝゝをくゝぐゝがゝくゝ此ゝありさゝどもかゝるおゝやけの
ゝゝちくゝまゝりゝ紙。わゝくゝ此ゝを永にゝあゝぜんとあゝ

うひのあさこけこやうとさだめておいすれつゆは
さのくさみさかひやみのといさあきさいしおきうひを
まふ大ねもわくひく二はくらやいはいよあくこのくさん
にはくさうさうのくあのはこくろふくくあんおいまに
やるはとしのたどくすりいおうろいさまぐ見くさせ給
ふ。ふどはうくあふうちる。くいづれをもとうくと。
ふひきくさせあつう。
日十七十ウ
。大ねいおけきくをまくえくも見ぬうあとおで
しくこくのひまるうきくしまくるよいれ枝のう

もくくおちくうくれはくくく

源氏君のうた
おとくかるべおびゞすんどゝくがけ
し。
侍従大夫
○これもゝやいあまくこれなるゝとわ
きのゝびれこゝちはひまなくにすゑをうゑひ
紫上の詞
くゝのきゝぬまるゝがはゝざんにおがいで
白氏文集の詞
ゑんやときこゝのへいゝと高しかうゑんまろいゝちれ
紫上とゝしてのうた
うへゝうもゝやゝもけゝとゝろまきゝて山ひゝゝれ。
紫上のうた
おいせびゝこゝちむつゝかりゑんとてゝをすゝまゝゝ
紫上のうた
ゝゝ山ゝれゝかゝゝ高ゝゝゝ

賢木十一ヶ

いでやこのをまらたてまつりたてるとくハ省たてつゞけるゝ
斎王のいまのうち　神ぐらゝ　あひもやるれぬさるべん
いづくにかとゝもれ。

にくきけしきうれしゝ度と人とゝ。わるくせわるきを
ぬ和かうり。

源ナ九十ウ
○つゞくめひわるゝ　源氏元の
口　源氏注の源ナるうるうるうるうる
十二注の源ナるうるうる
○ゆゝしうきまゝ。鏡奉ゝ源へる。面やせ給へる
うゝ世吾ゝ。源氏元の内
つゝけし。氏の中にや。せく侍る。ゝ物ゝ。ゝ
巻十二
女君。涙をひらめうけくゝ。物を思ひ。

○十日

源氏元

ゝ八ゝくさすゝ。ゝ物ゝ。ゝ鏡の
うゝけハゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
巻十三
ゝ。ゝ。ゝ。

（朱）
月ごげんぜんぞ行る神ハせざることとわくとも見ざるや
あらねひとりぬ。
（朱）
○廿一日
○ろけ月ハ女ぎろるがねぐろのどろぶきくくし
ゐひく。例の表ふらく出るゑ、かりけれどうまどだのめ
ハまろひ。ゆくくゆ月つぐるけりるがか
すこいてかぐるおろるゑへういるゆめびきと。
おかくつりるけりとのこおりむずん。一日二日を
まきろへぶたるとりぐるあやーうんぐせきろちす
るりの代。くくうすきあげくさーのろるぐざゐも

（朱）
ゐくしゐへハ。（朱）女ぎろうぐたるひろゐさ
ぐいぐゐへる月ぐ。いうおりげるくゐゑう。
わぐ身かくくちろるき世代わるしゐまざいろるすきさ
さすくたまちむとうーろちくかすけれどおや
いつろるぐいぐかるべけれ。
（宗氏）
いける世代わるを代ちぐぐらぎりつくいのちと人
ろきりけるゐ。ちるゑーゐどゐきちるゑけなる
まへハ。
（宗氏）
代ーくろ代余すくへくめけまへの別をおぐーど

めてゝがる。（伝氏系の分）ゆきさぞ　おぼさるゝんとゝと　ゝと　ゝ　ゝすゝぐ　かを
けれど　あけて　なばけ　ゝ　なるべきに　ゝ　ゝ　ゝ

足をゝでいうぐうすぐさむとすんとつゝゝあゝび
入道 紙をえうよのるわれ落たしぬおいの
なうぐうすりけり。
吉本社サ一丁オ
〇つまるまうるあ
ゆびをうちしあもあれまく姫ざとひそこいろ
れうこかさみだいさうにうさくちられひあ
るえざとにうぐかいのされしくゆいきあ
結花
今ハとくやどうをめとあんさけるまきれ根ハ
われをとするあ。

ほあみうあのゆうへ
あくあかひしれ
のうし。

〇ハサ一丁ウ
ゆまへるひとくさまくよかうくさてをと
をぬ木くされりとさへさひしうんさとめどめく
けるすうをあつう。
月 〇ハサ二丁オ
ゆくるまひきいでうちかつうあろもまこハいうぐうハ
足むとそうなさ格をめとぐめくかくるきぐうぐかつ
こあひける。
結於五丁ウ
月 〇うちにもるく参くのとくめれとるうでゝあぐきこ
やいづくうゝ知つまわるかつあへむるすきうゝさぐ
に足をゝぬぐかひあくかすくとるうれかるしたた

てまつりくもあうずおぐまひいつしかひある衛
さとびはまくはむとあくゆめびにこのくさはる
にこういのちものびはつれうちすくまひくかく
ゆくへもちくせあるとぬとおろくこもあぐこあをばえ
領 らうしまじをとのいくくをむひとをばきい
釈 しやくくるかしあるうあぐきををうをうくく
らむひとくまれおるくまるかしまをあきはろ
らをもはまくはいひぐくるろさくろをねくをば
まぐるをあやしとおりひくをを

ロ ヒヤウ
○ほ母は母の古の
むろのさいいくくをもみつのまくだらひあるる
あとるうをれいるをはるとうとまぐしかるくと
ひくもはまぐれあるでいくくうのおりひまをい
らむをもくくねがあげまくんをおるひも
くくびはやくるひつむきつひかくるみやはくも
ていあくんむうしねぐくみあやきるのまはる
ひをひようさあうなくくもいくすくしをおりひい
ひぐさくくかはれおるるやしをひきくゆるあるうに

女二文之

きゝうるどあ〜きぶめのとやうのりけやうむう
へうよ〜と学くめざまづかくだうたる人
りやあうむとげするどをうこうひちく

旅

源ケサニヨオ
かりうあれうちにくもかうる旅をあうひあんぬこ
〜ちよんぼううさもおうこさもあづうう
○上おあうどのとひける広たうこくあれくれだうう
ぐもうすうりけう。
源氏君
かう〜由よあをのこうける人うもゆくちうれね

すもひとやせん。
○上サニヨウ
○あやさうみうるなうこれかいうつうを見あひうく浦
やうう〜くもとうちずむ〜かつうさうる世れふうと
源氏君のん
あれどもめぞ〜〜〜くきうれかすうとのこれども
れをぐおもつう。
○上
○うらかつう見かつうるよおう〜うれ山ハうすこそる
うるくまうとに三ヶ里の外れうこちすうるうの
ちげくもたへぐう〜。
○上サニヨオ
○あゲあめれ〜ろにうるくあれうとくもおぐ〜や

らくに。ゑ〳〵さひとおやく。女ぎこれおがーたりし
さこゝ書こゝ。はこゝ。ことわらぎこれおなごろもなく
まざれもひーうぐ。ゆそでめいくーこゝりひやと
ゆく〳〵。
〇おのくふさとまこゝろがうびまこゝとゆくす
べうめり。

海路

日あうきこゝろうまれば。おひ風さへうひくまざさる
はとまざうりふ。かはけうこゝろつきあひめ。

〇ゑ。ゆ。ゆ。
〇ゑ。ゆ。ゆ。
ゆさこゝ。ゆこゝとなるゑゆくゑひまさ。ゆまのせくこゝざ
いげるうぐ。いとゑゑゑんおがーけるおさるさい
こゝちにゆこゝざこゝ。ゆわすしずゆこゝくゑゆゆれうと
へいくゝとゆこゝひゆゑゆつくゑゆこゝぐたゆゝとゆきゑく
むすあゆゆゆゆゆこゝりひこゝうゆこゝとふゆこゝちゆこゝーと。か
川いいさあゆけゝおゝりこゝさゆこゝ。ゆこゝこゝろわ
ううおゆせこゝうのゆこゝがこゝこゝちゆゆゆゆせゆこゝうのの
にゆこゝゆ。おゆゆまこゝろ。ゆこゝくゆこゝこゝこゝゆこゝと。

いとこ〳〵ものの
こゝろ

こゝろやすきこゝろおりひやくこゝにかゝる波もうらやまく
こゝろやすきよ舟をとゝめあらくしきを奇にて
うらがすくもやすくきるよりうるをとうてみを受
まこにふうさむうひとなさけり
舟人を待をおもとろおかしうがすべげ
に来れ実ゆる
きこゝろをゆくゝをちゝぬ神ゐいであそれいつく
よこゝををゝたむ
十四才
○かくよめあるうおのげこゝのひをつゝへまけど

ものゝ
ものゝ

ものゝ
ものゝ

ものゝ
ものゝ

もさわぐざうけり。かたでやとといあとろちづきぬ
といつるすこしいきづるこちすきいのふきこ
わくもかくとまりうりかたづおひたかどとうふ
くるれあさけるさ白ゐよさいり。

行路

橋原十八丁オ
山が川のおどろくとうるさくくずあんけおと
もせさせるとゆ。ものさわけわけくろこけう
わくるさ水れるしかもれあこ。ゆれ。おろる
なくものじてとうふくるまつるかれるさ白

ひろ風にもくろひくぬもくぬ。ものとおどろくぬさ
あれ。おくうありけが。
椎本サミ丁オ
○つくしいこくろ山れおどるあうさにいとおろ色
けるれとさあうれうのおちすまこことやえう出強ひ
けむ。ものつうひるさくまとうひさとどむうか
わくもるくうちとやかくかとれにまあうつきね
東屋六十一丁オ
○わどくもなうあけあるこちするおうるどいなう
ておうちくうさいるよ。おかどくるこ。ものくたとう
ものうくらあまのうのれて。れれくれうどうさこ

ゆうゆうとれいぜいにけるんかのいでさたるのの
れおよのゆうなるづかしときてゆもかるよもさ
のまろひよるひもあそこちよおうしうもきけり
わろのあひともにあけくいけるおとんおのくいるて
ふしーあくすうれいきて（業忠のん）ひとくんめくく車つまどるよ
せさ髪結かきぶぐきくくのせあひを
（ほ丹さん）
（ほ丹廿六ウ）
○きこくもんるくんにくうねどうれけーきるつけく
（業忠かんるんるんる

ふこうあるべし。ゆめあり。却とき〳〵ふだうくりれげうむう
しもさいはこちよのこころ、ハかるゝふこゝろあり
うば。あやうりゆる里れちぎうろれとおうん。

病

相つゝ七十オ
○ものうるさうにさいりけるのしるし紙。
口上
○まうこゝろもちいとたゆげうくわれうれけーきにてふ
たんぱいこ
美四十ウ 美二程雑の巻ちうん
○んぐさーさうれけこうちよまやこゝろひくねこうろ
ぎうゆおういうう。

巻五オ五十ウこ
○うちに却くすりれとありて世の中さまぐに
ゑ上巻の病のうち
ものしるし。
美巻こ十九十ウ
○ものうれ流ハけれ雪ようこぐ山風くはつまく
かきこぐりうあやまくおがさうれどれ流れ御こと
ものしさぐあけうる成。仏やすくおがけり。
口 世六十ウ
○朱雀院御くすりれとうたひうきくく
みえぬようがく人ぐいやこ。
口下 五十三十ウ
○ものうるうどこうるたまうそれどけんやあれぐ
源氏玉のし
日一日うひおりくうろ四ようんすりあげきなよ。

巻五のうづくこ
ものうるうどのくるし

たちうきぎにくるものをぞよつとものうくーあるく
おきのづりのてをたたくまとたたくまとはへね
口七十七オ
○女きたこいあつくむけたくとくがぐすきてすこ
紫式部
しさいやくよりてそすーあつりふーあぐこうちやをあへ
つもうがとこにもかけうあとあざりうちふくみ
きまのすぢもなくいときこにゆうくとくこの
をこおとろへるつもえさんとまーふくうつく
しげよすきたるあゆうよあはるふつきるぐせるあ
くらくびるりねけるむけるとはゆうこ

まぐいとたぐよりしげよおとぐ
口七十七ウ
○池いとすぐしげすく基はさ絶わるれ家
はいとこのもやうまく寄きくとぐはやうよ見て
源氏秀句
わるぬかを見あへおのれ記とうもすーしげあ
うれとのうまるよおきのづりくあーいぐーあへるも
紫式部
いとあづドゆれいかくくあーそまつるこう愛はさ
源氏秀句
こちすれいこぐくわぐ身さうきうとおゆるぐりく
のりうーをやと同ぬうけくのあへばこはくるもう
をれとおりうくく。
紫式部

きしとまるなどゝいふべきたまきゝよ葉月雪のか
かるだろう紙どのゝ。
（伊氏云 ちぎりおろむさしせるゝでも葉月雪のかも）
さゝろつぶれ。
（拍本七十オ 拍本の公女三人の中を接と云ひやゝゝ）
○さゝく打しありおりやせゝつゝむ花さきけおりろ
げよんきゝこちらくおりひやゝれゝゝへげよこのく
かるくゝおやゆきゝろゝむゝどゝゝきこゝちも
こゝぶろきゝバ。ゝく
（拍九ウオ）
○きいきゝむごゝよむゝへすゝゝゝすゝゝゝゝゝゝゝゝ

せきゝゝゝゝゝゝゝゝ

けくふ一ゆつり。ぶまう一ぬすびとのきそびけそひ
うらぞ一うんにくくすこすーゆつうちとひま
ぐうう用ことあうとかゆ。ぬりくわずうひるくへおの
ぞうう髪ひげもうぐ。ゆ。ものむつうきけそひもうゆ
わざすうぶやせさうぶひるもいもくちうあく
ちうすけうく。枯ひうばそのおどきうみ
けそひうとわげよ。きもそうけあもしげうう
夕方サ三丁オ
○あ一けのうぶうるうちすと。ぶ一くぶ。ゆた
ま。

○いとうぶうぶうく。ぶまうぶうう。ぬもむぐうう
まんこのようう三日ぶうう。ぶうう。ぶうう。

にうけとめまゐらせきぶ命をもなげさまゐらせ
ごんぬけちぎりかけそえれ。ぶひまぶのせきむこと
のくそう人ちきねぶこんぬうちまりのくおきりよお
ぎさしけか。

○秋まちつけく。世中すう涼しくなりこ八ぶこ
うちもいさこのさ八やぐやうるどうおとすれぶうこと
ぎまーさう八角ぶしむだう拾おさるべき秋風まう
袖ど。寄けきそうぐちうくすぐーまう。

○風すぐく吹出るゆ音にせんさい九ぶまうこく

けうくまうるあ。ぶ。ぶ。ぶ

保氏天
やくりせばきてゆかあるふ寿の世よおくしかきぶり
かぐらへずもぐみ。とくに洞をそくひあへあ山ぶ文。

中文
杜風よ志づとまるぬ寿のらを祖う苔紫北
うへとのこと見む。と宗くうハ明よ。

総角七十三丁オ
○ゆつれのうへ北宮ごとすぐくぐれくまの
ちくぬ折ゆ屋のまるどたとへむとまくきくれ彩
ささおりひつぐけくれくうひぶ山へくまあてる
かぐりあくくんてあよ白きはるうこへけるこもし
絵ちくぐかどへねまごまくうすぐるくうちやくき

河竜殿へ々白と
あくれ世ト紀宗
ム自ふの寿ぶ風
まりくうのるく

くり白ひよすくあをくもみまあくさまきり
てあぐあつぐくへくまくひとむつきれかどもらん
人よんせまかし。

物怪

夕白廿六丁オ
ひすぐるかどよすくれ孫りあへるよりまくぐみ
に。いとはくしげする女あくおのぐとやぐたくと見る
をいたづもはわさぐかくくとるくきひとを
ゆくおりくくときあくゆくくくとやぎまくくを
らゆれとくこれ。

源氏ちのく
名ふく
ふくくの人をかきおこきはと。

と見るよりのぶ（源氏系図）おろしてこちらへくるぞとうきをば
ぜんもきてよばりたくおださるしばまちをひさ
ぬきてくちに銜をとくとおちてみてまをお
そうりとおりひるさまにくまりてまり。
口サセイオ
○まりはつまどをいでゝ戸をおしあけゆへまゝにわど
のくぜもきてよけり。風すこうちふきるよ人にす
くるくさふゝ袖ぐりこみ袴こり。
口サハイウ
○もろくのくまりたをもうごくべきさまにも
あゝねばちきれば本性をひきせくるわるくまわ

きとの母ぶ例をねとるくおまへちくえまわるね。
つくまきさるまはしまもえのわゝびるかりくこやとと
ろにもゝびてゝうとてやしませくゝ見てまへたゝびは
まくゝゝるよ美に見て法るかちしたる女おりゝびま
見てくゝふとぶてうせね。（源氏系図）（四島系図）
口世一丁オ
○ゝはわのゝまゝゝきゝりやはきはまくたる扉
風のゝゝかゝこれくまゝゝくゝ見てまのまのくあ
しおとびくゝとふきましに法ゝうゝ美のゝ
ゝちに。

○美十七丁ウ
○大殿はいとのけつるくおろくづうろうわづらひ
ありよはいとすずまはちくはとれはこれ（コラヲ）どいつりの
あるとゆえありつるつひくおがつづくれば分ひろつはき
（六条ハ良ホのし）
まげきうりくるよ人をあつまるどおりよむもはけど
ねおりのよのくがるるるまひいさりやあんとおが
しまるるるもこのり。
ロ十八丁オ
○すうもうちまどろるゆよ美にはろれ姫（美ヒメ）さこは
（六条ハ良ホのし）
おがきひとはひときうるくあるとろはつきく。
ゆるくひきまさぐりうはるるはゆ似ぎはけいうきひ

たるころいできくうちかまぐるるどかくゆふ
ことびひきうよけり。
ロ廿丁ウ美ヒメのけはのうるくはりるるはとくるるき紙ちばど
○いでこのるどやゆ分はけのうるくはりるるはとくるるき紙ちばど
やすあ由へときこてむとくるひかくまありあんとる。
きくるおちをねば紙りのおりのひとはおまひいぶるの
くづるうのよまん（カ）ひりけるとなるうるいぶるいるく。
おげきわびうるるみづるくわづまは紙ずひとづや（お屋敷）
ようるるひのつるびはのるまよるあけるひうれひと
にもはのるびるはるるはつ。

（廿五丁オ）
○ゆくのくらちぐ人ずるよーめやうるうどぐ
に例（美士）ぬ世ぬ世ぬ世

けけのさまとみてくるがおきまくむくつけくゆ。
おがーまろーとたろうねもゆくしけれバされ
ろくくはれるくくひきすをてさまたのくくもせ
させあっぐまくとたうれ人ようくねきつもうぐ
いふするものだうあまてろうきき人ばおろくろ粥
なることいひ出るものをたーうるなけりせ
よまくひとれちぐぎくむさとばんよまくぐさひも
らしねべくくんとをいへさくるむいさうまてもまん
ずべきとのくまくべかろくとくるまくく。

おぼのこ

わりあてうあくねさくるしかるまるあぐくくうおぐ
きするきこはまくるりいとつらしくとるきさけば
りのくくさすぐよりのそぐーだるけるひろくくびか
ろくいとうとまくくびうけれバのいまぐどおぐひ。
おのけの白おぬかるろ
かうくれけるくくふくくもいとうまくーくかくだけるとと
ろむ。あまかけりくくもれ人まれどくろくくとくなりぬ
まばるれうくまぐくもふくくおぐくわるやのくむ。
ろかれぐくくつくとくひ家くーぐれちるる
むとまるのるりけるうれるもいきくれる。

人ようおとしたおがーすてーこうもおちぶれたるものごとめつらいぐるまむこうこうびふくろにうりきまを。めるまひいでるーまむこうこうあく人いでるきてるおがーゆるーでことひとれいひおとーあむ式だるよちづきかくーあへどこうおりへどこうおりひむだうりふかくいうーきみけいとひまれだかくとこうせきまりおれ人をふくにくーおりひ宵ゆることはまけれどまりつくいとはあるりかきこうはくーえちづきまわくーびはまりをづよかよんん

きくはるふいはいおれつこかろむだうれのおが式せきをまへずおうど縫ねのくーることと身はハくろくわびーきかのほとおこまきさんおくさこまたふとこさこと白きまくーねいとこあーくなむ中文にもはこうこをはくこきこて文へ西わはこうこはくへのおだる人ときーこうひうまむかつくひまるる秋文よおりまーくーこうわひれはつくこうこうむべこうむくはくこうおと式かまこうはせきを文へとくやーきこうまむるはるるこどいひづこれどうのくけよむこうひてあれ

ぐらのしたるもむもかこうらいるけれバふるどこのく
うへちバ又おとゝ多ゝ思びくこゝてあり給く
○さゝれたる（小野の尼元の）ようひとりしあきゝとおすゞやうる
いまひとりまゝごとれのふるつぎゝしさゞれ
らう法師よゝこゝ人もうゝぬうしろの
よいきゝりるもかゝ見ゝ本れゝ給うとま
げれゝりやと見入るゝ（法師）ゝ人さのくひろゞた
るゞ見ゆゝかれいまるゞと立ゝまりくゝ人をつくく
すゝく見れバりのくゝるすゞこゝりきゝりれ蛍

化したるゝにくゝ見あゝハさもゝくゝひゝりハゝすに
ゝのゝこゝるゝハまゝひゝるハゝるゝれゝこゝるゝのゝん
といゝくゝさゝゝれりの（退）ゝゞくゝきゝんゝゝりゝくゝさゝすゞ
にゝゝかまりるかゝられ髪ゝふゝハふゝりねゝきゝこゝちゝた
るゝおゝれゝりゝる大位ゝゞゝりもゝくゝのゝゝきゝ
さゝゝゝくゝちゝくゝゝりゝゝれゝさゝれ見れゝハゝこゝハゝゞく
ゝゝゝくゝくゝ大きゝるゝ本れ根のゝゝとゝのゝくゝくゝ
にゝりゝくゝハゝくゝ
○（六丁オ）鬼ゝ神ゝきゝゝゝ（けぶりの絵）

けんぎのおつまひよ。えかうれ奇じ。まのりまづく
とき。ねをとうくひけば。（はまのさうく）うをひきつまくうまくく。
いでかれさぐみけてまあ抜まやまきよかれまむ（法師の名）
やとうひけくうをんとするまむ。りけんもも
ちまもなりけかおまやうんとむくつけさ。
のりうがうきさ式人よこんせんとおりひくきかを
ひきねぐせんとすんばうつぐ。多れぐりまく。
口六十ウ
○かくくおいてぐ。ちまさて作りぬぐ。かきけりまよ（法師の名）
うういぐきめといく。傍記（傍記の名）まことけひとのうもちまり。

うけいのちたくねをたるくすてむことハいうーさこ
とまり。流よおぐぐいを山よまく麻さまよ人よとう
へらまさく。きまんとする式ふさ。たすけぐうむはいと
うまーかるぐ。人けいのちひさうかうまーきこりのあれど。
のうけいのち一二日まをまーまぐいあるべうぐ。鬼も
神まもあうぐ。領れ。人よおまれひとまちうぐれて
もおれうまさうけれうまうすべき物よこうあれ。れ
けうまうぐすくひあべきまはまり。れこうまうね
ぐーあをのまをまぐーてだすけさうろうんづひよ

しぬべくぶいかるきうよのつびとおのひとくさけ大紙
きくぐいぐさいまきさるのみぐでしたもだいぐいきわぎ
うおいくうわづひおの人はびあすうよるうねね
をとりいまくぐけぐいかるつびぐ出さるんとびとも
ぶくりあり。
十五十ウ
○一つりし世ぬとと思ひいづまどすみむ和ふれとも
しひとだよだたうよさるくいもおりびでわれ
ハろぶうとくぐ身をあげ一人ぐかいづくよきるける
にうとぜあくおりひいづまぐいとみくとうのを忘

あげきくうるひとは孫ふうしよつまどぶたるまちて
おうしよ風をげうの波もあくきこくをひ
ぶりあおうるりうぐきくうこ田くうぬもおぐ
えぐすのとぬをきおりるぐいくべき
かくもまどをおくかいうむもあうぐくまくこうろ
げうくおぬうよう老んと忘ひうを紙おうぐまし
うくく人に見つけまむもうり鬼もるもくひく
うしるひてよといをつぐぬぐとおうるぶいとき
よげる男ぬうきくぐおのがりとくとうを。

いぶくこころぬせ。白ゑとゑのひしも。ゑとときさんし。人せもあるこまゝとお
ぶし。わどうりぶくこころまぶひるひるあり。ものゝ
こころよす。多出さくくさいせをこゝさくうせねと。ゑ
を。つひよかくさいのこともせびうりあるとおりひさい
らうあくとおりひりぶくちせとゝたくく
いうふもくおぶびひとゝいろきけばおかくれを
ぶるもへよけり。いうみうきさまゑちゝぬ人よあり
うされゑてつむこまづうつひよかくゝいきへ
つまあるとおりふもくちをゝけしばいらうおぶく。

みうくゝもぶくゝゑつりきる日ぶろいうゝこゝろもみ
きさまるくり。ゑいきさうまあるをうもこのうきるを。夢
ぶうりゑをぶよまあるひ。
（十七丁ウ）
。夢ゑ（尼天のふし）やうるひとを。ゑんをうるうと。このまきこゝ。な
ろこびくぜめくおうゝすゑつぶいくゝほぶうけづを
殆ふさばうりこのきまうひきゑひくうちやるこう
つをぶいうもみぶしゑきをうふしばつやくとけ
うゝるり。一年たゝゑつくもぶこゝおうるゑるまく。目
りあやよぶいうゝき天人ゑあまくぶるを。ゑこゝむ

天人宮どのゝ御うた
人のうたをハとり
ゆやうきこゆくら
すると。

やうよおりもあやうさこゝちすまどゝなどゝ
かぎりいみしく哀なるよ
いづくまでしと深くひとのさるところよりいとゞおい
せずとせめくとふ
かうしかどよ
まるどもさてゝ
いたることくいただいてゞ世よのしるとおもひつ
ゆくまでゝとゝ
くおかきるる本はつゝもてゝ人は出さくゝ

相壺文衣の差
きりみくゝ

くいくこゝちする世ゝ
世ともえおもひあまり
ひるく世ゝ
じきたくる人もあらばといふうゝとくい
たまよ。

相つネハ丁ウ
かぎりのしゞ
ゆくゝ
えくゝ

衣傷

文衣の母衣

きいはきうるをきめるゝたくきる
ものゝりんとなきさゞき
ゝはおくりは女房はくるまをもひはうぬひて

八ツ出て座より出る。時そうの八ツ半ひの。やまんばくさせり。

おもぎといふ所よりいとうあしうてさそうきろるよ
ねこつきみるこころちがいろどうかをありけんむまき
れうろ武乃ろくるすかおいするのとおりのぶことかひる
けしばかもひよりあいなんろくまきろくまハ
なきへとむこふろよ山ひるりみなどさろうのろま
むつまどくるまろおちねべうまどひあへハさはお
りひつうとへくわづひきろもうちろ山
はろひのりこ位のくわおろるあるゝ勅使て
ろれ宣命ろむまんろるゝきとろりけ女房と

ぶるいはなしろあるぶのろびくちをうおがさろるきハ
いろひとさざろれくわをぶよとおろろせあへまりり。
口九十ウ
○出ぐまろぶよひちくあくろきせあへバかんてま
はるひとへ寄けさ枕まり。
口十六丁ウ 相つ不出ぬ京の方へ
○ぐろむけはぶあし。勅使月はしとさへうきうつあろ
ぶよおがつぶけくまくく時はもおがつうるりし
ぶかくくも月日ハへよりとうきまうおがあろ。
口十八ウ
○月もいつ夜。
相つ不の事
雲よりうへもまろくくぶ秋の月いろぐすむん

のきぢよめ宿おがーやまつ。やり次ぎうげつく
くおきたれそもまく。ちとれつきのとれかゆの夢
きこゆかパうしまるまるすべー。
口上 人めをおがくくるれおどよいくせまひくさま
どろまをみつとうーぐうまおきさきまつく
もぐのくるもちくぐとおがどいぢふも粧あさまろ
ごときおこくくせまねべうあり。
口十四丁オ もめきらーやきぢ。のきぢまるれけーきバ
うーふれさせまひく大座敷（メイシャウシ）ふれのるどいとハ

夕皇 廿九丁ウ
口さくくうう心つよかりまへどわるきぢこちまくく云
（源氏若の上）
かひまくかうるをんまよやくくまるてつと
いぢきくあぢ（源氏若の上）きくいき常まへぐいくーされ
んせまひうぢ。れまへぢひえいうまれげもひも
のうくくうう面
口廿丁ウ りのくまよやうるれぢむまハふうぢくく。人
をむまくくを。すーてむことれぢくーおがさうう

うへさく。おかうされむくゝぎたるくゝむ。夜
中もすぎるまけむうゝ。風のやあるくゝう吹たる
はまゝく。松はひどきはふく家をくゝ。きりる
音はうゝゝゝにすきたるもふくうゝはまるや
ゆをおが四。

○口世四十オ
○口世四十オ 低のうちよりいとをひくもものをおさへく思
侯氏家人
ふまいというゝゝゆしがるどそのうひくゆまぐりう
らむ。いきうゝりゆるくむきいうるさうちさんだに
てくいきうるまるけりとつくやおもむとんまど

○口世八十オ
○千世八十オ 月さゝゝあくうゝれるどいさんの火も
不はうるるとうゝはれうるどこやはたるどる
ゆを。掛むつゝきるるすとも見て張をびるさて
だるこゝちゝゝ多記くおりつきね。
○口上
○口上 つゝうりさへすこきるゝいるやはるうゝたうるそ
おこるへるのまはすまひいとゝ表るうゝこのゝはう
ゆをはうるすさくゝんゆうはやゝが女ひとうるく

ひはるふもおがうゝはるよがむものをさあぐるうゝも
まゝ。

〜ゑのこうて。はたもうてはたらく法師ばらは二三人ものぐうしはくわざとはたらくゑしてぬとゑ仏ばらはちでうはうやもみるおこるひまてくいとあやうう。清こうばはたらくこうばひうおわくゑこうゑとはけえ。

○世八十四

○いつはたはたへまきバ火とうとうむけくゑをい屋風へ

○久仏の上の

だてくふ〜ぎうぱうるわゑ記〜うむと見まふおうろ

○源氏考

〜きけもおうばくばうばいうらうたばうるさまもてまうば

○日十三

いさくうかはうろうるやうろうるゑ。ゑはうろうへくはは

○日十七オ

ゑ。ゑはうはうはう

源氏 思しくんけるかぜとこゝろぶとまゝいとゞおそろ
むつまじきろかとひとりきちゐへどえさしろくもき
きてゝ。
日 五十七オ 源氏 ○はなのかゞやくまくいとゞまさりたるかぜ
まりくおりひくらもとおりかやとつゝ。ゆんずをい
ゆゝとゝ。
美 廿六ウ ○とりべ野よりのぼりたてまつるわどのゝこゝゝゝとお
かりもなくこゝゝゝるかぜにおりたるひとゞも。寺にはゝ仏
はゝ。ゆゝとゝ。

美ゝとの奉送のきこえし

日 廿六ウ ○秋のすゝゝいろゝもちりはてゝきるゝかぜとい
もそろのきはいろゝゝもちるかぜはるくはえふく
かりのこゝ。
日 廿七ウ ○八月廿余日はかりの月のあかしはいとゝはけしきをの
すゝゝゝゝゝゝ。
美ゝの奉送
を見あはせもとわりよいとゝはけまはいとゝはけるゝあら
きをひく。
源氏 ○のがりあるはかりはうまとわりゝもどるゝくゝのあ
はあれはゝゝゝ。

門サワ口イウ
○えゝ吹風のつけてこそ来ぬさうびよりあさ
なるぶいまもくとりつゝあるさび。
大夜
いまも乃んとくるく神代くぶたうるさきあな
しやまとうぐゝこ。
門四十二イウ
○おまへるをとゝみくゝさへどいとうるくゝき
とうちるさたるぐろさむきゆめべけゝきり。
賢木十四イウ
○おはるとも古日ゆきバおかりこれよの中とぢむる
相撲節七日ゆ
ろくけゝさるつけくまゝてはるくるさ中文
れがくろれうちるり。

冥途五十ウ
○かるかぐるけひらちけてだいのたりるやうや
まゝうけうて拍ろくるがうりければ。ぐゝもたくま
けさこれがこゝのくひおきくろがのくとをぐ
この門ことろるけこまうをくわがつりたるをようゝで。
つろうまつまとのこのくれいひけり女ぎてころう
きすくせつりくさけれ人はくまくいうるさま
にたぶまぐゝふべきにろつるむとおりひまげきなく
をんろよ人京れろぐりつる拍ゆきバたゝこゝぐむべ
きろくるゝいうぐけ人れがるよのゝおくを

ひもぐるまで。わがまどもとうちもちねとうしろあて。
うかるーきこえいひおりへどもうちうちえとぐめもも
おもうくうせね。
○殿上人などなどひとうきてくうこわうくも
のくさへまきまきはうきまう。
○上口二条院は御前おさくくはさくくはのくもはの
えむはをうるどおがいはぎおとだうりとひとりご
ちまひくくへおたうとあつぐひまバは袖んずうに
さりうおまひくく。日ひくくもまきくくしまあ日まま

やうきくて。山ぎはのこずえのつくもまうよ雲はうに
くわうかうがまひうきまう。なまごとにもあとぐまう
ねうまうなどいかとりのと衣におがさう。
源氏君
○日さに雲にうまびくうすきハりのおりよ神よ
いうやもうがつくへきうねうるれがうひう。
柳糸 女房にもつひうえ弟面ーー同く者ままぐく。袖
○紅葉
おきくいう命うにうくうでね。
○一 世四才 条は女はぼまーておがつうくて。わうきまひよ
ーううみさへうへく。日ぐうまうまうぼひうきえ情

人げすくまうふかすげまくおてくつうひゐした
まひゝへはるかまりとふひきこゑおれこゑひ
し夜うまゐどうはすめこのうづりぶもこゑつくく
しつるうおりひうおむぐくかするよ出入ゆ見ゑまこ
ゆくよふおくくと衣ハつきねのよるんうりけるるくつ
うひゐひゝ江でうどがとつゑよひきゐひゝ琴琶
わ契今ゐどれ結ゐとうきゐるやさゐゑくゑ祢をく
てゐゐいとうりれいくきわゐるりや。
ロ世ニイウ
ロ乃世ニイウ 寄れ春ゑいつうけづりく花れとさ式わすれ
一条ゑ天のうゑのし

ゐけゝくさうるをゐどゐ江ゝうのゐるゝくさふくゑ梅へく
ゐ。ゐひろくよやつまき江ゝ。さゐゝうつゑくゐるつくく
さ江くゑゐやうよ和つゑ。ゐゝ。ゝくくゐゝくくゐくゐ。
あくゑき故くのゝがけくひくくうくわゐすきくゑ。
和りひつまくくゐるくゐ。大和花おゝくくゐ。
けり。
ロ世ハイウ
ロ和ま〳〵ちくさ櫻はれいくゐるくゐ式くゐ式ゐ
一条ゑ天
くくちゐるゐゐゐゐもいゐまくゝくゝくゐゐるゐけれゐあひゑ
むくとゝとくるらゐゐくゐゐ。

ゐ春ゑ。花の春ハ
ゐくゐれちゐゐゐゐ。
金ゐゐくけを。

夕暮
時しの間ばかりそこなへぬ名ゑ自ひけりそこなへかしな
宿はさくらも。
○四十ナウ
いつ〻蓮はもれけしきすびそよかすそく花は咲
しるさずあるこゝろをそ。けづやぐ紙ゑのよさはあ
をうぐうゑ。
致仕大臣
ふれしこの春ぐくまあまくくさきまま長のこゝろ
もきこゝるまこゝろれ。致仕大臣物名の
夕暮十三ナウ
○月くまるくすこゝわゝくこゝりもまきゑまびさし
いりまこゝりあさいゝるひさしはあいぐもまきさこゝち

すまこバ。月はゝゝるよむゝるゝるゝゝる。
法法十四ナウ
夕暮
○すぐこゝるゝるゝゝるゝゝとおかゆきまきこゝろはすゝりし
うどいゝるゝむせる。ゝゝりしだゝりもはんをゝるむゝかゝゝはも
はゝゝゝるをゝゝまきゝゝぬこゝゝるゝるびゝゝゝるゝるもゝゝるまびゝお
ゝりひゝゝゝゝゝるゝのをゝ。ゝゝゝゝゝはゝひゝまきゝゝせゝまゝびゝ
ゝゝりゝゝゝるゝゝこゝゝはゝゝゝゝゝ

ものゝ
ものゝ
ものゝ

あはれやすぐるあらひまさぐひまさぐひまさぐ
夕雲雁の心
ものよいうらまひのやうくぶけばうるはしきまうと
おりかはるもわりまさることるやう。
口 十六オウ
○ ものくるくとひろき野はとこころもなくたちこそてかき
つまるくいうりさけうるしどいはそもろあきけのり
いくらだくのかりたまひわるもまいのくとうるしど。
添氏考の心
ものへるくいう一宮殿の西むさちくひるかるを
てぶおりまはけるを見てくまきるへもさばりい
つくきの身をとりのくんもくねけずさへすねん

紫式部の著述の後
まり

○ 十七オ 添氏考の心
○ むりへ入れさこのこと 美しこと
ものろ月をおりひいけるふもうまいはるりのくおろけるる
まやはきのろかれけのきくるるおがくしれと歌はまで
くまこまどひるつり。十四日まうせるひくさきはは十五
日は暁ありけり。
口 上
○ 日十六日の朝
日いとどうるやうるさくつりくく。世べは雨もかく
まてるくまるくて。世中はがつぐるるぶぐいはも
しくいうはれば。添氏考の心紫式部は日記にもいく世のはふべきかるう

すゝさはまぎるきるもの。むつゝりはしかいかつもとしいまるゝく
おもかやどゝ。ふゝるとさに浜のうゝるゝ松おゝ世はゝ。はしはゝど
とすぐさんとゝめゝよ。猶の世さゝのくるゝだゝへゝどゝか
つまゝけ。
口十七ノウ
○風雅分半ぎちく吹ゆゝぐまゝよゝおゝりはゝとゝ世ゝ
いゝゝかのゝくゝまゝんゝくゝまゝゝ物をゝと。高ゝく船ゝ
えゝゝゝよゝまゝかゝゝりはゝおゝどゝの美はゝちゝ世ゝゝゝゝど。人
ちゝまゝゝゝゝおゝりひゝゝゝゝけゝゝゝゝ

ゆるかすぎ給はるる。
○廿十ウ
○そらはけしきもすごくなるねぶかき人はかれ
しくまりもよのもまをすることなどあまやうきこ
えあひくぐちよ。
牧牡丹花
いすゝへはなさへとのまちちくゆまてす神す
寄ぐ招きうよ。源氏考
らまくるとうくうはれ秋のことあひしうかきあつ
めこがたくるこぶ分ちひとつのへ結をぬまぐはよ
うへ。

寄けさいむうふまをおのあべはわるとれの
よくうたくひま。
に 廿二ウオ
○さもなるまぐきくへろいうぐはれをと宝
はしるつけはぐなまぐおとをねいすぐまくく
紫式部
かはうるもんそまつうひとはおのひまぐさも
べきせるぬぐろうむつまぐはくうとつまを
きるをとくおぐものこれる余うあうきと
をまげきつあまるうさせはるの必ずこぐ
におるひうとのうはひ。

幻 三十オ

○さもなりそつもでかりけることをつけつ中宮紫式部

りのうらめしうおぼゆるこそまことにきこえんと

まひしまどもおぼゆ源氏物語

もまもまもやうるみぐるまことをつけくもさや

うるみをなてまりけんまどとをもらうくし

うおぼせしこころぞへまとろいひとれあるさを

いとこうなんちりまひまぐらんでまてまおを

はまとしうどひとわるづいうまらとすんを

おぼゆたるしまずこいにをこぞうあひけんこ

紫大

少ないとおしうくやうおぼゆまさまひまろ

もうのまるまうちまま

幻 三十ウ

○入道殿やのうちうちぞあるうちわどうれを

見たしも久しいぶんまいさしかどとよあれ

ちくいうちきるれわぶやとおりひまつりこ宮まあ

たきまうしまうにも雪ふりまうしこのう月よそら

やまうひくわうぶもひいるあうにおかくこ宮れ

けしきまぶかりしまいたまううおひうなる

りれうぶ袖のいううまやしまつりけるとひきか

くるくぜうくまきこうこうまつりやどれたうこう
ぶ祝ひすぐる四ちうまくどもきこんいうるんせよ
うとおぶ法ぶけうこうるぶのふぶもどうしまおうく
女房まうぶぶうこうもぶりにまるるるるれぶ。
いつをうつけまつる。寺でうれたるのこうちする。
ぶうこうれさぶきこうしうくまくかるる。
伝民だ
うきせよいはきぶまんとおりひつて出ひれ外よ
まうぶぶほどうある。
に（ニヤウ）
○例れまどうこうはたてうづかしておうるひちよ。

うぶうこうるぶうぶおうこういでぶ法火柄まうこん。
ロ（五十オ）
○さいれ世よつけくこのうずおりふぶきことをきくあるる
伝民ろ多れ
まうう。たうきうれにううきまるぶうこうきうこうこうとん
にくちをきき製にるあうけうるをとおりふこと者と
さど。迎れうるくうきをちくすぐく佛うどれおきく
あつる方るうぶ。うきをちひくちくぬぶりよなう
うまばかくいまれゆぶちうきするふいうきき
きれとどうをれつうよすくせれおどもうぶうれ
こううのきさよのこうるくれをくこうやすき

にごいまるん家の（遠州ぶんしゅうの）ぶんぐ一ぶくなるまるをさまされ
かくるく。のうしうげるやるぶひとくのらまたと
てゆきわくきるんがどうぶきるひときれかうぶ
きぬぐいきいとるるかーわろうけるこうれ
かどうをとくぶ自邦のごひかくあつまきぎき
ぐやぐくさぐろ御洞をんをるひとぐ。まーてせ
きとあむうるるーさくうら拾くきてくさ法る
るんうらきりーさとおのくうちおまわけれどさ
もえ家くぐ。むせかつくやさね。

○人（ニンウ）にむるもむかとぐるの八さくーくおりひーづめ。こ
ろうをさんとおりまとも月ごろのおがけるてるむこ
ぬあうきまかるてすーきひぐともぐるこくするのよ
の人よとるるやきんぶの名さくうそなのぐべ。思
かをくるすむ人にも月ぐるるといるきむもおる
ぐーくるれどするかきるさくておりひやるこれる
そるるうるもかんぐるーきことぬめとかるハこくく
きはきるくをこるるとおやせば大（タイヘン）おぬさるるど
いうぐるこすんぐそくう（法氏ちのん）翁面ーるひける。

口十三丁オ

○ 故さきのくらまつりしまこうれいたのこと
源氏物語の注釈書の一種
をもんくもまことにあはれあらばとおぼしめしまこと
うこれせるつけく故かしばかりさきのまく
うう見たまうちまくさうとぢめたるすきくうう
おとうおぼしまうりみぼうとうわくんぎいるも
掛けたのそまふうくわわぎうとしあるひとおも
くまうくんときのひうるのくわすれぐうきただか
うるうるうるうるうきのうはのうびをとうのきわど
うりおかつしてのうきうつうとうにおわるす

口十四丁オ

○ 思せまうちすてうまうくわぐ身もひとれうもうひ
たうぶけうくうかるうされをとうぐうきにまんすぐてうの
れと新も由思ものうとうもおうきすぢもひううなな
ひめくうひうぐううとれあううずるるまんあう
けふうるど秋ふうるまくむういまばりのうう
にかくてものうつへうへき秋をとおぐうるぐうかつた
まうを女もりれと新るよおりめぐ
口十七丁オ 光源氏の紫の上
○ おりうよりんていはおりぐどわすれぐうまう
いとわうぐうとおりひうまう

日十八丁オ
○あるよごとにつけてもあはれにつきせぬ。思ひづくさにこころをやさ
めつくしてとしごろもなれまひおほ
にまるれたるかたちぶのかたちもまさ
るものいろのつくろひとたづるぶ。
源氏物語 あるきの人びとのめなれてやきつ
かぬかたちぶとくいはぐるうるはしみ。
大和。
夕涼 あるくぶるとさるつくるんみるきとれおるちだ
るはつまづきうと。

日十九丁オ
○いとたのつさうろずぐきかうるくあるあるつよ沈の
葛はさうるうるを見んなのみよいうよおるうるあどまだお
ものあるくにやまくくそつくくとおさすうるぶどよ。
日もくれよけり日ぐるしはは奇さるのやうよ拍人の知ぐ
しこれゆるぶくをひとうのこ見なのふいびまづかひるう
けるぶ。
源氏物語 つきぐくとわるるきくくに反はは目をかくくぶまーさ出
はくる孔。曇はいとおるくとびちぐ出夕殿ヨウ殿ようる
ともぶぐと例はるるくるすぢのくくらるる仕

源氏物語の
人のうたいくるるる
泪ぶくん。

源氏物語
日くくしこのうるるぶの
やまくくぶぐーま。

夕殿螢飛思悄然
孤燈挑盡未成眠

まつり。

源氏夫
ふるさとをとりてかへるとき、みぎりとりあるき
おりひろひけり。

○ 十九丁ウ
七月十五日、例よりかたらひてこのうびども
りあそびくつまづくるまぎれあり。人々集る
ひとも多。まづ彩色ふうびとこころおきあひくつま
戸おしのけあつまる。和歌披講とぶらわるべく
とりたてりくんわるるまぎれおもひく。

源氏夫
七夕のあさいまだくらくわるまぎれなつ

宮づかさ
宮づかさ、かぜのとりあつめてまいりたるこ
もれ法華経をとりてまいりたるこ
けり。

○ 廿丁オ
いまさぐつる月日をすぎてくらの
しくとしをる。

桂姫 五丁オ
○ とりくつけるこの花をとりあつめて
こころつよんとやしあるべきもとかう
けり。

○ 六丁オ
まさぬうらうるる日ろびよ池はどうぐとも

うちうつ。おのづ（ゑだ）さへ（ぎ）ぐ（ら）ゐ（ま）すどとつのいろ
うきさたくとんまひ（ぬ）ーどもぢぐひそまれわをうゑやま
しくなぐあのひくぐ（ぬ）ぐ（ら）ゐ（ま）ぢ（ら）ゐ（ま）ぢ（ら）ゐ（ま）ぢ

このうひおたるかの家ものこそ
ぶれたさもひとりのゆくにくまなどひくかうでは
いくぐうかざうのんだいのうもきもめぐうひおうん
めさうつ姫人こいさうろぼそくぐうくすぐうて
たくおりひまどこ
○ゆうまくなぐうへて祝うどうくひさうやくん
うべきうのうやいおりひうくうるうけかうずる
ゆうおりどうぐうまこかきくうり物見てぬうちくあへば
おりゆうくうく

○ゆまくなぐうへて祝うどうくひさうやくん
うべきうのうやいおりひうくうるうけかうずる
ゆうおりどうぐうまこかきくうり物見てぬうちくあへば
おりゆうくうく

○ゆまくなぐうへて祝うどうくひさうやくん
うべきうのうやいおりひうくうるうけかうずる
ゆうおりどうぐうまこかきくうり物見てぬうちくあへば
おりゆうくうく

○ゆまくなぐうへて祝うどうくひさうやくん
うべきうのうやいおりひうくうるうけかうずる
ゆうおりどうぐうまこかきくうり物見てぬうちくあへば
おりゆうくうく

○ゆまくなぐうへて祝うどうくひさうやくん
うべきうのうやいおりひうくうるうけかうずる
ゆうおりどうぐうまこかきくうり物見てぬうちくあへば
おりゆうくうく

○ゆまくなぐうへて祝うどうくひさうやくん
うべきうのうやいおりひうくうるうけかうずる
ゆうおりどうぐうまこかきくうり物見てぬうちくあへば
おりゆうくうく

○ゆまくなぐうへて祝うどうくひさうやくん
うべきうのうやいおりひうくうるうけかうずる
ゆうおりどうぐうまこかきくうり物見てぬうちくあへば
おりゆうくうく

浮舟の母の尼を殺さんとせし法師の事

人をうしなふつよかくしのつるとおぼしたる
にくからぬ女つるをとこ
ちふしまへるをかくるぐるしのくるまも
見るわざをするこそうとましかりけれ。
時雨二十ウ
○我まゝどころいさとれるつとれるりけむを
きりしおどしたるこゝろ地をもたることのくち
つきどころへぞとくるくるひらるいつもかぎり
のこゝちもせず我をおろしげきこゝろをもせ給
ものどりゆるづつこゝきこゝおのつよあどりやうい

浮舟の母の尼を殺さんとせし法師の事

おこゝろこゝくさるわこきみどもれやうり
○十二十オ 浮舟の公信のかくしたる浮舟の母を殺さんとせし法師の事
かりしさるかちづくあいざあうづさ拾しかりし
けるひるどれいこゝくゝ惡しくるすけきがらつれ世
世ゆゝよいるどかくしゆるもひいまびのどうまくすぐけん。
中ぐいるいさこにふしぼかんうこゝきゆくゆゝき
さこれるずゝらとかゝることれすぐつけくうう
ゆおすべきすこゝるのひりさこゝとゝみさくゝるざた
つゝ身れおすひのうるよかくまいのひとすくなが
らつをゝかとゆるどれにくゝとゝんのつるやひとれん

をおとこ共ん[illegible]くゝ伝れ[illegible]たまゝ方役は[illegible]
かくゝうやうとはあるんとおもひつけまひ
つゝおとこるひもの[illegible]
口ハ（十三十四）
白ハ（カヽ）
うつしひもすきさるまくいうるばかりのけるん
まどさわぐよやうくまどづくしまひくおぼ[illegible]
づゝるにしりぐ（浦舟のまん）うりしさるハ悪しうにくく思
ひいでゝきまひけるハまでハ（三）やまひおりさ
さるまのくうんせくかくもどろうるいせあの（間がらるゝ後也）

もゝせどとかゝくくりくかくゝとおぼしけまどおのづ
ゝとちるりはけまバいうるゝくみかくおぼまどひ
四人（三）ものうきまぐもあどくみんとゝ人をけう
けまバ（三人のまん）ゝくおれかけきをきくまま
（兄弟の名）されおまよるかうゝかよゝのこにもあるぬ第
けり兄まひくハうるゝもどき弟ぬべ見人ぐう
しるぐゝへまゝしハまどるゝうハおぐるまをい
うるくくもおさるまゝ弟ぬぐるまんこがるむ
るすゝさむるちらゝまひけう。

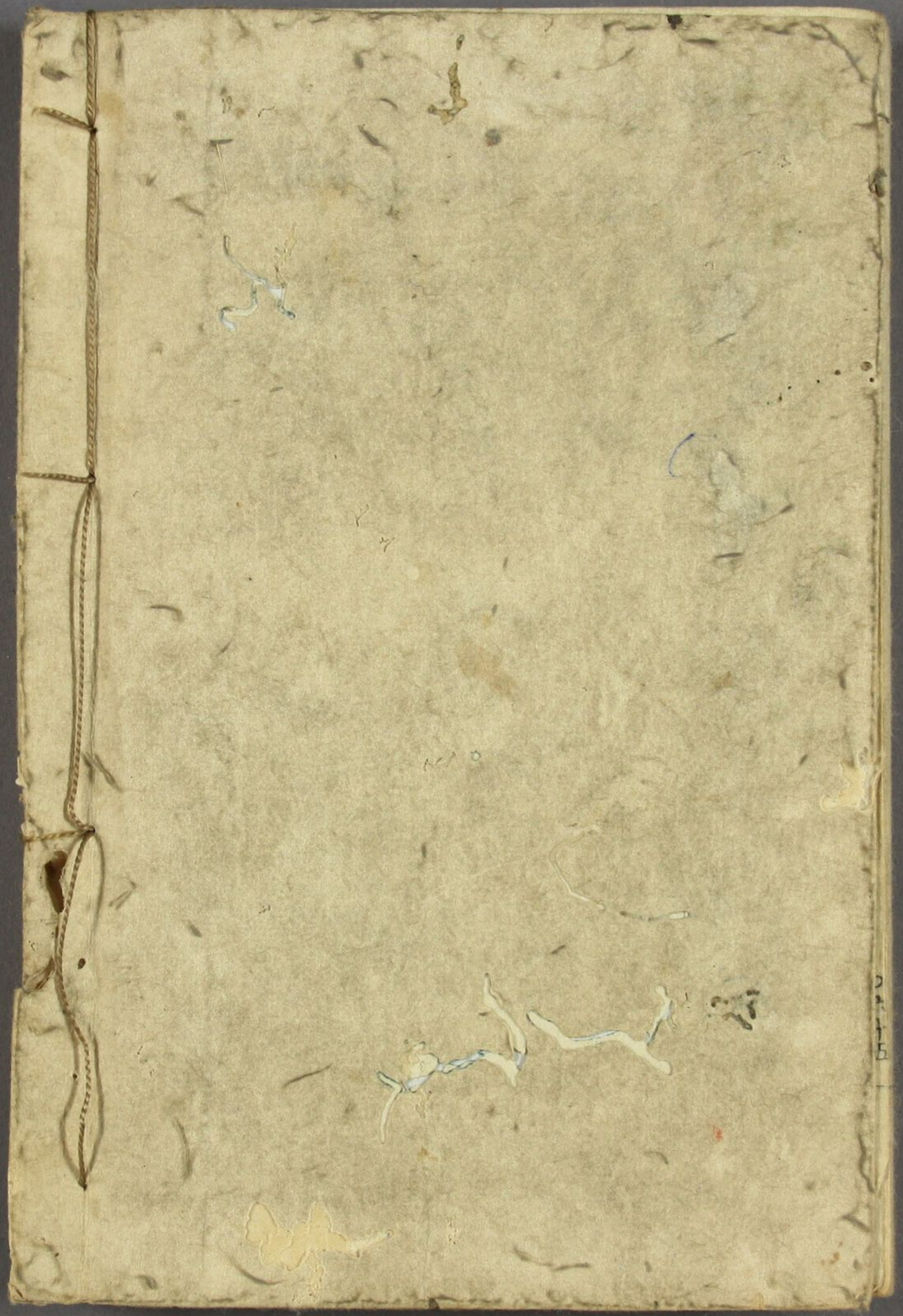
白うるしぬれどもつゆ
世はさわぎとうるる
ひよりわくく
蓋茶の白うるしのくく
しくやわりあ
うせるひよりまぐ
もあくんぬらもと
ぐくくこ白すこ
やまさり白つり
まさり白うるしぬ

まぐらこと
ぬりうるひくる
蓋茶の白うるしぬ
なもしもいくく
くくまくかくまつ
くくまくまつ
白うるしぬ
おどくくさ
ひべさあくひの
にもぬぬくわ
さくるぬがくく
くくまくまつ

おつまばいとそこしこまけどうのこどもいとぐ
さくろくむまでめしくひとわきとやこのもしを
おがめとそこだぐしさりやまでさいのことのこおだん
うりけりいつようるうりけむをうるまでこしとの
ろくひしまのこちちよ月ごろおがしわろうつむ
とおりつまさいかさこ八うまこきいわすまをつをさい
白えのふ
ようのくもおろうるかれりのくせちよおがゆとさ
はいとかろねるゆようけくごよ家こどとりの酒を
たくふもりまわさおくこうかるゆけまわがくこど

ろよんろわきようけくもりのくんをそこくんよさいふ
だりりのくなのまをちろねひくるもなりこど世界
はつまるまきこをもろこおりくるもどまるき
とうこやまくくもむるくくもがきこくのうまよ
ぢくらきあをかるりがまるゆりくんさまるもお
ゆやるようみぐうこと家うちまのりのゆ
は十丁オ 美濃屋の家にてゆりまるとこ
こちちまぐくいくいくいへとうあさどるるゆけること
くやちうろ氏おとのきこゆるかぎういんのこさわぎ
まのひくがくをぐまたづゆどるるこのるゆ

吾妻はまたのかたにハをそ一稿朱相をもいつまで知ることなくハ。

しくてゆやこあるるいるるさるるくづまろ
るとゆうつせるまじるけむるどゆるるまくぢ
ひ。

紫文製錦六巻 平